様式３

佐賀城本丸歴史館協議会議事録

１　開催した会議の名称　令和５年度佐賀城本丸歴史館協議会

２　開催日時　令和６年３月 25 日（月）14 時から 15 時 20 分まで

３　開催場所　佐賀城本丸歴史館　会議室

４　出席者　　委　員：髙野委員、富永委員、長谷川委員、中尾委員、
　　谷委員、古賀委員、北村委員、何川委員
　　佐賀城本丸ボランティア：高祖会長
　　文化課：南雲課長
　　事務局：七田館長、白濵統括副館長、古川副館長、
　　武谷企画学芸課長、宮尾企画担当係長、
　　秋山主査、野下主事、田中主事

５　議題　　（１）令和５年度事業実施状況について
　　（２）令和６年度の事業計画について
　　（３）令和６年度予算について
　　（４）その他

６　会議録

　会議の冒頭、七田館長から挨拶があった後、議事に入った。
（事務局より配布資料に基づいたパワーポイントにより説明）

（委員）
佐賀の歴史・文化に関する研究会とは具体的にどのようなものか。

（事務局）
研究会をはじめるにあたって、県の学芸員、文化財専門職員及び佐賀大学や鍋島報效会と事前に打ち合わせをし、「佐賀城」・「佐賀藩」をテーマとする分科会を設定して実施することとしている。
分科会の内容については、研究会を進めていく中で、参加する学芸員や研究者の意見を聞いていきたい。
活動内容としては、研究会及び研修会を予定している。また、最終的には研究の成果を冊子や WEB 上でも公開していきたい。博物館施設では、研究の内容を反映した展覧会などができればと考えている。

（委員）
江藤展に関して、出品資料に関するリーフレットや図録などがあったほうが

よかった。

（事務局）
　江藤展の会期中に図録を作成したいと考えている。

（委員）
　江藤展において「佐賀戦争」と統一した表記を使用しているが、性急だったのではないか。教科書など「佐賀の乱」が一般的に使われている現状では混乱を招く恐れがある。

（事務局）
　佐賀城本丸歴史館としての考えをもって、対応していきたいと考えている。江藤新平の復権という目的に向けて取り組んでいきたい。

（委員）
　佐賀城本丸歴史館開館当初は「佐賀戦争」が統一表記になっていたが、外部からの意見などから「佐賀の乱（佐賀戦争）」という表記に変わった経緯がある。
　江藤展にあわせて「佐賀戦争」の表記に戻すことは日本全国に対するアピールになるのではないか

（事務局）
　多くの方に江藤新平や佐賀戦争、佐賀の乱のことを知ってもらうきっかけになればと考えている。

（委員）
　「佐賀戦争」や「佐賀の乱」の呼称は、学者（研究者）が概念を確定させ、多くの人に理解してもらうことが必要だと考える。

（委員）
　資料収集のエンフィールド銃について、江藤展で公開されるのか。

（事務局）
　江藤展では公開しない。今後の展覧会での公開を予定している。

（委員）
　出前講座・施設貸出について、利用団体は公共性の高い団体や文化的団体が多いようだが、一般的な団体への制限はあるのか。

（事務局）
　基本的に制限はないが、博物館施設しての禁止事項（飲食・非公開での実施等）があることから使い勝手が悪いのだと思う。
　今後は佐賀城公園などと連携して、様々なことをやっていきたいと考えている。過去には結婚式や音楽行事などを行った実績はある。宗教的な意味合いが強い行事はできない。

（委員）
　入館者数について、英語圏の入館者が増えている要因はなにか。

（事務局）
　パンフレットの配布数での計上なので、どこの国の方が多いのか正確にはわからない。しかし、館内の様子を見る限りでは、東南アジアの来館者が増加していることから英語圏のパンフレットの配布数が増えたのではと考えている。特別なプロモーションを行ったわけではない。

（委員）
　展覧会について、見逃した人向けにリーフレットや HP での解説があるとよいのではないか。

（事務局）
　R6 年度からは（テーマ展においても）展覧会の解説を記載した小冊子を作成していきたい。

（委員）
　博学連携について、コロナの影響で来館することが少なくなっている。
また、佐賀の歴史についても学ぶ機会が減っている。
国スポ・全障スポは、県内外の人へアピールするいい機会なのでビジュアル的な広報があるとよいのではないか。

（事務局）
　博学連携ができることをアピールすることが必要だと考えている。

（委員）
　出前授業について、ハードルが高く、頼んでいいのかわからないという先生が多い。

（事務局）

他館の場合、佐賀を誇りに思う学習で頼まれる学校も多い。出前講座については学芸員の人数による制限はあるものの、出来る限り受け入れている。ハードルが高いわけでは決してないので、希望される場合は連絡をお願いしたい。

（委員）
江藤新平復権事業の「インパクトのある映像」の作成とは、どのようなものを考えているのか。

（事務局）
特別展は見てもらいたい気持ちはベースにあるものの、実際に足を運んでもらうのには、ハードルがあると考えている。復権事業では、江藤新平に興味がない方に向けた映像の作成を考えている。江藤新平がどのような人物かを説明する短い映像を作成し、アリーナなど様々な場面で流したいと考えている。

（委員）
学校の探求の学習で、テーマを設定し学習して現地に行くような取り組みもあるため、それらと連携することを検討するのもよいのではないか。

（事務局）
検討する。

（委員）
他県の美術館で有名人の音声ガイドの貸出があった。本丸歴史館でも大きな展覧会などでは佐賀にゆかりのある有名人の声で音声ガイドを作成したら、若い方への PR になるのではないか。

（事務局）
常設展示用の音声ガイドはあるが、コロナ禍で貸出を縮小していたため、貸出が減っていた。
有名人の音声ガイドに関するご意見については参考にする。

（委員）
佐賀の歴史・文化に関する研究会について、佐賀大学の研究者とは本丸で選定して声をかけているのか。また、人数や活動の周期についても教えてほしい。

（事務局）

佐賀大学とは、地域学歴史文化研究センターを窓口にやり取りをしている。
事業は、県の学芸員と文化財専門職員を対象に実施していく予定。活動の周期は、おそらく不定期になる。年度末には活動・調査状況をまとめるようにしたい。研究会で終わるのではなく、還元できるような事業を目指していく。

（委員）
歴史館設立の趣旨が決まっているのかもしれないが、幕末期以前の時代についても展覧会などで取り上げてもらいたい。

（事務局）
幕末以前についても取り上げていきたいと考えている。